

## 「アブラハムの死」(創世記二五章一〜一八節)

### 1 最終回を迎えて

アブラハムの生涯を創世記で辿るのは今日が最後です。来週ローマの信徒への手紙を取り上げ、新約聖書がアブラハムをどう見ていたのか、どこに視線を向けていたのか、確認したいと思っています。

六月第一週から始めて今日で一八回目です。最初に取り上げたのは一章の終わりから一二章のはじめのところでした。

アブラハムが七五歳のとき、神がアブラハムに、突然と言っているのだと思いますが、語りかけます。あなたを諸国民の祝福の基とする、ここを出て、わたしの示す地に行けと。この「主の言葉に従って旅立った」ところから彼の人生、したがって物語も始まりました。

知らない人にそんな命令を下すことは、神とはいえ、ふつうにはないことです。「わたしはアブラハムを選んだ」という神の言葉が、ここまで辿ってきた中であつたのを思い起こしていただきたいと思います(一八・一九)。神はアブラハムをよく知っています。アブラハムも主なる神を知っていた、その信仰にすでに生きていたと考えてよいと思います。

アブラハムの信仰は、彼の父テラに、さらにテラが出たセム族の祖ノアにまで遡るものです(一〇章)。このアブラハムを、神はいま、みこころをなさせるため、特別に召し出したのです。アブラハムはすでに高齢です。しかしこの時が、神の定められた時であつたのです。その神の声に彼が聞き、そして従つたとき、彼の真の人生は始まつたのです。

ヘブライ人への手紙で言うと、まさに「行き先も知らずに」(一一・八)神の言葉に従い、旅立ち、異郷の地カナンに来て、半遊牧民としての生活をはじめてちようど百年が経過します。

そのアブラハムの死が、今日の聖書箇所に伝えられています。彼の人生を全体としてどのように私どもが受けとるのがよいのかということ、後で少し述べたいと思いますが、ともかく彼が、神の祝福のうちにその終わりを迎えた、ということははじめに確認されるべきことです。

祝福のうちに終わりを迎えたと言つてよいのは、先週読んだ二四章の始めにこうあつたからです。

アブラハムは多くの日を重ね老人になり、主は何事においてもアブラハムに祝福をお与えになつていた(二四・一)。

晩年のアブラハムへの祝福を証しするのは、アブラハムの願い通りにイサクにカナンではなく、自らと同じルーツをもつ人々の中から妻を得ることができたということでした。先週私どもが見た通りです。

ご承知のように、神がアブラハムに与えると約束した祝福、その最大の栄光は、彼をして諸国民の祝福の基とする、別の言葉で言えば、神の救いはあなたから始まるよ

うにするということでした。そのためには、何よりも、彼自身が祝福されなければならぬ。また彼の祝福を次に担っていく子孫が与えられ、土地が与えられなければなりません。まさにその実現が、イサクとリベカの結婚によってはっきりと見えるものとなったのです。

ところで、この私どもが先週読んだ二四章で、アブラハムの僕エリエゼルがアブラハムではなくイサクを「わたしの主人です」（二四・六五）と言っているところがあります。

迎えに来たイサクをリベカが遠くから見つめて「あの人は誰ですか」と聞く場面があります。アブラハムの僕エリエゼルがそれに対して、イサクを、「主人」と呼んでいます。ここを根拠にアブラハムはこの時すでに死んでいたという説をなす人がいます。もしそうならアブラハムはイサクの嫁を見る前に死んだということになります。そうするとアブラハムが神の祝福のうちに亡くなったのか、少し疑問になります。おそらくそうではないと思います。アブラハムは、イサクの結婚を見、神の祝福をその目で見て死んだのです。その意味では、二四章が実質的な最終章であったと言つてよいかも知れません。

## 2 アブラハムの死と埋葬

アブラハムは祝福のうちに死んだ、それは間違いないありません。今日の私どもの聖書箇所二五章は、アブラハム物語としては最終章です。彼が祝福のうちに死んだことを確認し、なお残された、いくつかのことを、彼の生涯を知る上で落とすことのできることを書いています。

神の祝福のうちに死んだアブラハム、その周辺のことを伝える今日の箇所、アブラハムがイサクに全財産を譲ったことが、第一に重要です。次のように証しされています。

アブラハムは、全財産をイサクに譲った。側女の子供たちには贈り物を与え、自分が生きているあいだに、東の方、ケデム地方へ移住させ、息子イサクから遠ざけた（五〜六節）。

事柄として重要なのはイサクに全財産を譲ったことですが、「側女の子供たち」というのがそれ以上に気になります。今日の箇所の最初に（一〜四節）記されたアブラハムとケトラとの間にできた子供たちのことです。ケトラという女性、ハガルと同じく女奴隷ですが（歴代上一・二八以下）、そういう女性がいたことは、私どもにはむろん初耳です。

アブラハムは「再び妻をめぐった」と一節にあつて、これが前の章、二四章を、もし受けているとすれば、サラが死んでからということになりますが、イサクが産まれたときでもアブラハムは自分の体は死んでいたと言っており、六人もの子をなすことは考えにくいことです。

いずれにせよ、ハガルのほかに、側女がいた。人間的に考えられるとしたら、ハガルが追放されたとき、じつはアブラハムは置いておきたかったのです。しかしサラ

は許さなかった。彼女の強い意志でハガルとイシュマエルは追い出されます。そこに生じた心の隙間のようなものをうめるために側女をおいたということでしょうか。聖なる族長としてふさわしくないことだけれど、他の理由は考えられないので、ありうるかも知れないと、例えばカルヴァンも解釈しています。サラの死んだ後、つまり二四章の続きと考える必要はありません。ハガルがいなくなり、サラだけになったときにも、側女がいたということです。

こうした中で、アブラハムが、イサクに全財産を譲り、側女の子供たちにも「贈り物」を与えつつ、移住させ、イサクから遠ざけ、神の祝福の約束を確保しようとしたことは、彼の信仰です。神の約束に対して、アブラハムもまた人間的な知恵を尽くして忠実であろうとしているのです。

こうしてアブラハムは、一七五年の生涯を終えます。その報告を見てみたいと思います。

アブラハムの生涯は百七十五年であった。アブラハムは長寿を全うして息を引き取り、満ち足りて死に、先祖の列に加えられた。息子イサクとイシュマエルはマクペラの洞穴に彼を葬った。その洞穴はマムレの前の、ヘト人ツオアルの子エフロンエフロンの畑の中にあつたが、その畑は、アブラハムがヘトの人々から買い取つたものである。そこに、アブラハムは妻サラと共に葬られた（七〇節）。

私どもの新共同訳は、「長寿を全うして・・・満ち足りて・・・」と訳しています。が、口語訳は、「アブラハムは高齢に達し、老人となり、年が満ちて息絶え、死んだ」となっています。元々の書き方は、とくに長寿で、おめでたいというような書き方ではありません。ただすでに二四章一節を踏まえて申し上げたように、彼が祝福の年を重ね、死んだことはたしかです。

他方、信仰の人アブラハムも私ども人間に共通に定められた宿命を免れていたわけではないという事実にも注意したいと思います。アブラハムも年老いて死んだということは、私どもも年老いて死んでいくということです。「外なる人」（身体）が衰えていくとしても、そのことで私どものところが弱くなっていくことのないようにということです。聖書は、人が無制限に生きることによしとしていない。「ある種の諦念をもって、有限なものを受けとめていた」（フォン・ラート）。人は限られた、神から貸し与えられ生を一所懸命生きることによいのです。

注目されるのは、イシュマエルもそこにおり、イサクと共に父アブラハムを葬っていることです。その後の二人の関係は聖書とくに出ていませんので、何か楽観的なことを言うことはできませんが、イシュマエルが今日のイスラム教とつながっていることすれば、ユダヤ教とイスラム教がアブラハムの宗教として一つとなっていることはやはり記憶されてよいことであるように思います。

### 3 信仰によつて

さてアブラハムの人生、私どもはこれをどのように受けとめたらよいのでしょうか。皆さんどのような印象をもち、どのように受けとめておられるでしょうか。人それぞれ

れに評価することが許されます。聖書はどう見ているでしょうか。ヘブライ人への手紙は、このように書いています。

信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し行き先も知らずに出発したのです。信仰によって、アブラハムは他国に宿るようにして約束の地に住み、同じ約束されたものを共に受け継ぐ者であるイサク、ヤコブと一緒に幕屋に住みました。アブラハムは、神が設計者であり建設者である堅固な土台を持つ都を待望していたからです。信仰によって、不妊の女サラ自身も、年齢が盛りを過ぎていたのに子をもうける力を得ました。約束をなされた方は真実な方であると、信じていたからです。それで、死んだも同様の一人の人から空の星のように、また海辺の数え切れない砂のように、多くの子孫が生まれたのです（一一・八〜一二）。

ここに「信仰」とか「服従」、そして「待望」という言葉が見えます。しかし何より「信仰によって」という言葉がくり返され、強調されています。

この箇所には挙がっている事例は、アブラハムの人生の中の、もちろん一部にすぎません。

挙げているのは、第一に、最初のアブラハムの召命のこと、次に、カナンという異郷の地で、他国に宿るようにして、つまり寄留の民という、まことに肩身の狭い立場で、天幕に住みつづけたこと、そして第三に、不妊の女サラが、しかも年老いて子を宿したことです。

これらは代表的なものであって、私ども思い起こすのは、もちろんそれだけではありません。例えば、寄留の民としての問題は、エジプトでも、ゲラルでも、数々見てきたところです。イサクを献げるように言われたことは、いま挙げた三番目に関係することとして、最も大きな出来事、試練でした。それは、その箇所で私どもが確認した通りです。

ヘブライ人への手紙は、それらの問題を「信仰によって」乗り越えたのが、旧約の偉人たち、とりわけアブラハムだということです。

神の祝福を求めている歩み、それがアブラハムの人生の旅路でした。それにしても彼はどれほどの困難と試練の中を歩むことを余儀なくされたことでしょうか。むしろその中ではじめからいつも立派に振る舞ったというわけではありませんでした。しかし言えることは、いつも神に従っていることです。それが私どもには印象深く残っています。

アブラハムは神に従い「信仰によって」生き抜いた。この信仰は、神の約束の言葉を、すでに現実になったものとして信頼して歩むことを意味します。彼は私ども人間の見える範囲のことを現実としたものではありません。もう一つの現実、見えないけれども、神の約束の言葉によって指し示されていること、それを現実として、その現実にも歩もうとしたのです（ヘブ一二・一）。アブラハムはその生き方そのものを通して私どもに語りかけています。